

シルクの歴史を未来へ

来月16、17日 岡谷で10年ぶり「サミット」

蚕糸博物館開館60周年を記念

蚕糸技術を継承し、シルク文化の発展と創造を目指す「シルクサミット2024 in 糸都岡谷」が11月16日から、岡谷市のカノラホールなどで2日間の日程で開く。岡谷蚕糸博物館の開館60周年・リニューアルオープン10周年を記

念し、同サミットが市内で開催されるのは10年ぶり。「由緒あるシルクの歴史を未来へ」をテーマに、同館の高林千幸館長による基調講演のほか、研究や活動事例の報告などを行う。

トは、農業・食品産業技術総合研究機構、大日本蚕糸会、かつて製糸業で栄えた同市などが主催。博物館などによる情報交換の場として岡谷市内で始まり、現在は全国のシルクの産地を会場に、蚕糸技術の普及と継承、新たなシルク

ポスターを手に「シルクサミット」への来場を呼び掛ける高林千幸館長



産業の形成に向けて年1回開催している。

初日の基調講演では、高林館長が「なぜ岡谷は世界一の生糸生産地になっ

たのか」と題して話す。国学院大学大学院の学生による「製糸業から発生した岡谷の味噌醸造業」をテーマにした講演、新たなシルク産業の創出を目指す取り組み、上の原小学校の児童による春蚕の飼育についての発表などがある。

2日目は、市内の製糸業の歴史を伝える「近代化産業遺産」の見学会を開き、旧山一林組製糸事務所、丸山タンク、旧林家住宅などを巡る。高林館長はサミットを通じて「地元の製糸業の歴史を知ってもらい、新たなシルク産業の創出につなげたい。岡谷シルクブランドも発信していく」と話す。



申し込みのQRコード